


研究室紹介
平城宮跡発掘調査部史料調査室

平城宮跡発掘調査部史料調査室は、平城宮・京の発掘調査で見つかる木簡の整理・解読、及び遺跡・遺物の文献史料からの検討を担当しています。今年5月に出土文字資料として初めて重要文化財に指定された大膳職推定地の木簡を初め、1961年に平城宮で最初の木簡が見つかって以来これまでに出土した平城宮の木簡は約5万点、長屋王家木簡・二条大路木簡という平城京内の二大木簡群を含めると、私たちが担当する木簡は17万点にも上ります。これらの木簡の一つひとつから最大限の情報を引き出して公開し、また木簡そのものをしっかりと守り後世に伝えていくのが史料調査室の責務です。いわば古代の証人である木簡の番人ともいえるでしょう。全国出土の木簡は25万点、その約7割を現在3人のスタッフで維持しています。いずれも文献史学（日本古代史）が専門で、発掘調査にも参加しています。

木簡は、たっぷりの地下水に保護されながら溝・井戸・土坑などの中で粘土や砂にパックされ、日光と空気から遮断された状態で初めて、1300年もの間腐らずに残ってきました。ですから、現場で文字があるのがわかっても、炎天下で泥を落として文字を読むのは禁物です。整理室に持ち帰って筆や竹串を使って慎重に泥にまみれた木簡を洗うのです。

ところで、木簡を使う利点の一つは、何度も削り直して再利用できることで、削り取られたカンナ屑状の細片に文字が残ることがあります。これを削屑と呼びます。削屑や破片の現場での選別は不可能なので、土ごと整理室に持ち帰って洗浄します。微細な断片も逃さぬよう、ふるいの上で土の塊を手にとって、少しずつ丁寧に泥を落としていきます。長屋王家木簡や二条大路木簡が出土した時には、コンテナ1万箱分の土を、実に5年半かけて洗いました。

木簡を読む最も基礎的な作業は、木簡を肉眼でじっくり観察してスケッチすることです。私たちはこれを「記帳」と呼びます。水の中で木簡を少し傾けると、光の屈折の関係で墨痕が見やすくなります。微妙な筆の動きを漏れなく観察して記録します。記帳は木簡を読む作業の基本中の基本で、微細な削屑も1点1点記録します。文字の残りが悪い場合には、赤外線テレビカメラ装置も有効です。墨は赤外線を

吸収するので、墨の部分が強調され、また木目の情報が捨象されて見やすくなるのです。

記帳が終わると、専門のスタッフによる写真撮影です。木簡のようなコントラストの弱い文字を鮮やかに出すのは至難の業です。原寸大の焼付けを作り、木簡1点ごとに台紙に貼って研究用資料とします。

読みが確定したら、主な木簡を『平城宮発掘調査出土木簡概報』(既刊37冊)として公表します。最終的には、一文字でも読めるもの全ての鮮明な写真図版と釈文(解説付)を収めた『平城宮木簡』(既刊5冊)、『平城京木簡』(既刊2冊)という正報告書として結実します。その後木簡は科学的に保存処理を行いますが、それまでは水(防腐剤としてのホウ酸・ホウ砂の薄い水溶液)に漬けた状態で、温度湿度の変化の少ない収蔵庫に保管しています。ただ、水の減り具合や汚れ具合のチェックは欠かせません。脆弱な遺物の管理には細心の注意が必要です。

こうして私たちが解読した木簡のデータは、奈文研のホームページでも、木簡データベースとして画像とともに公開しています。ここには木簡学会の協力で、全国出土の木簡のデータも入っていて、全国の木簡を一文字単位で検索することができます。

なお、私たちは42年間培ってきた木簡の文字を読むノウハウを、できるだけ学界共有の財産として生かしていくべきだと考えています。現在日本学術振興会から科学研究費補助金をいただきて「木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」という5カ年計画のプロジェクトを所外の先生方のご協力もいただきながら進めています。木簡解読技術を蓄積し、より客観的な検証可能なシステムとして提供したいというのがこの研究の主旨で、数年後にはより豊かな古代の文字の世界をみなさんにお見せすることが可能になることでしょう。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏)



木簡庫に眠る水漬け状態の木簡